

古社叢の「聖地」の構造 (3) —— 諏訪大社の場合 ——

田 中 充 子
TANAKA Atsuko

はじめに

諏訪大社は信濃の国の一之宮である。しかしそこには本殿がない。拝むのは「山」であったり「木」であったりする。ほかにミシャグジとよばれる「石」や風を鎮める「薙鎌」などの信仰もある。みな自然を対象としている。日本列島にまだ国家もなく神社もなく、神々の体系すら存在しない時代の精神文化である。

本論は、古代の諏訪におけるそれらの自然信仰を調査し、その構造をあきらかにしようとするものである。

第1章 御柱

1 御柱祭

諏訪大社ときくと、おおくの人は「御柱祭」をイメージするのではないか。諏訪の人々は「おんばしら」といい、祭がはじまる1年も前から準備にはいる。若者のなかにはヒゲをのばす者、髪を長くする者もあらわれるそうだ。御柱に乗るための精進潔斎である。

一般の市民たちも、家の新築、増改築、結婚式などお金がかかることはすべて前年にすませてその年は祭一筋になる。ともかく諏訪市民の「おんばしら」にかける情熱は尋常ではない。そうして準備された「御柱祭」は日本三大奇祭の一つといわれ、全国からたくさんの観光客があつまり、諏訪の町は活気に満ちあふれる。

諏訪大社の御柱祭は、むかしから式年つまり干支の寅と申の年ごとに、上社・下社の宝殿をはじめ建造物の建て替えがおこなわれる。ほんらいは祭のたびごとに社殿を建て替えたのだが、財政的理由もあって、現在のように御柱だけが6年おきになったようだ。

社殿の建て替えは一般的に行われているが、諏訪大社の場合は他の神社とちがいで、そのたびに社殿の四隅にあらたに4本の柱が立てられる。(写真1) 御柱祭の中心になる行事だ。上社

本宮・前宮、下社秋宮・春宮の4つの宮があるから合計16本の御柱が立てられる。いずれもモミの大木だ。4本の柱の内側が「神さま」の降臨される場所である。

祭の前年に、御柱にふさわしいモミの木大を奥山で見立て、^{しめかけ}注連掛祭、曳綱打ちし、斧に火入れし、伐採し、木落し、川越し、などの山出祭^{やまだし}をおこない、20キロメートルほどの道の曳行と柱立てなどの里曳祭をおこなう。上社の場合は八ヶ岳の御小屋山から、下社の場合は東俣の御林からそれぞれ木を曳行してくる。これを「御柱」と称して数千の人々が上社本宮と前宮、下社の春宮・秋宮の社頭まで曳行し、数万の群衆の見守るなかで、御柱立てがおこなわれる。沿道の参加者・見物人は数百万人におよぶという。



写真1 上社本宮 一の柱

祭のハイライトは「木落とし」だ。「どうせ乗るなら木落とし」と唄われる見せ場である。下社の木落としは、氏子の若者を乗せたまま、御柱を約45度の傾斜面を高さ100メートルの木落とし坂から落とす。御柱の上の若者は、滑りやすく長さ16メートル、重量12トンもある大丸太にしがみつ、いっしょに転がりおちる。祭のなかでもっとも危険な行事で、過去に何人もの死傷者をだしてきた。その勇壮盛大な場面に、観衆は釘づけになる。

祭の最後のクライマックスの2日間は、40万人とも50万人ともいわれる見物客がやってくる。むかしから「人の山を見たけりゃ諏訪の御柱を見にゆけ」いわれるゆえんである。

このような祭は諏訪大社だけではない。御柱祭の年には、大社の御柱を皮切りに摂末社、地域の産土社、地区の鎮守、親族巻の祝神、小祠にいたるまで、秋にかけて一年中おこなわれる。このような「おんばしら」は、地縁、血縁の祭りとしては日本唯一の祭りである。

2 御柱祭の起源

民俗学者の矢崎孟伯は「御柱祭の起源については諸説があるが定かではない」とする。

おなじく民俗学者の鳥居竜蔵は「南鮮にある古い風習で、大木を立ててしめ縄を張る祭りでその中に罪人などが逃げ込めば、誰も手がだせない場所とされているが、一種のアジールとなるのだ」とする（『諏訪市史』）。これは「南鮮の蘇塗^{そと}説」である。ほかに「風雨鎮魂説」や「方位観念説」などもある。

考古学者の宮坂光昭は「おんばしらの起源は不明である。いつ創設されたという記録はない。何本曳き建てたかもわからない」そして「中世に書かれた『諏訪大明神画詞』には〈寅申の干支二当社造営アリ〉とあって、すでに完成された祭りの姿として続いてきているとある。した

がって〈おんばしら〉は古代、あるいは縄文の柱立てまつりに源流を求めることができるかもしれない」という（『諏訪大社の御柱と年中行事』）。

縄文時代までさかのぼるといのは、注目すべき見解である。

しかし縄文という時代に、日本にはまだ干支というものが入っていない。干支の制度は中国の制度である。公式に仏教と千字文字が入ってきたのは、はやくて6世紀、欽明天皇の時代である。ようするに縄文と干支とは、何ら関係がないのである。

最近では、陰陽道、原始時代の宗教、東南アジアの中の日本などというはばの広い視点からの研究もでてきている。しかし、有力な説はまだない。

3 式年造営

諏訪大社の社殿造営について『諏訪大明神画詞』に「当社造営 桓武ノ御宇ニ始レリ」とあり、記録としてはこれが最初である。

桓武天皇の平安時代は、東国のエゾ征伐に力を入れた時代であり、何度も遠征を試みた。坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命するが、田村麻呂はその途中、諏訪大社に戦勝を祈願し、エゾを平定したとされる。帰京後、勝利できたのは諏訪大社のおかげであったと報告し、朝廷から神事料が与えられた。そして桓武天皇時代に、諏訪大社の造営の費用を信濃国中に永代の役と定めたとある。このときの寅年は延暦17年（798）である。これが最初の造営記録とすると、平成22年（2010）の御柱祭は2003回目となる。

「おんばしら」の正式名称は、「諏訪大社式年造営 御柱祭」である。式年、つまり旧暦の干支年号の寅と申の年で、数えて7年（満6年）ごとに上社と下社の宝殿をはじめ多くの建物を建て替える。

しかしここで疑問におもうのは、式年造営である。

「式年造営」に類したものに、伊勢神宮の「式年遷宮」がある。伊勢神宮のばあいは20年ごとに内宮・下宮などの建物が建て替えられる。これは本殿を中心とする建て替えて、周辺の建物や橋、鳥居などをふくめて大規模におこなわれる。

ところが、諏訪大社には、本殿がない。

諏訪大社にはいまでこそいろいろな建物が建っているが、はじめから本殿はなかった。上社前宮はもちろん本宮にも本殿はなく「宝殿背後の守屋山もりやさんをおがむ」のである。これは「山岳信仰」である。拝殿や宝殿というものは聖なるものでもなんでもないから、建て替える必要はないのではないか。にもかかわらず諏訪大社で式年造営をおこなう、というのはどういうことか。また、伊勢神宮にならって諏訪大社が式年造営をおこなうというのはおかしい、とおもう。

4 小野神社の御柱

御柱祭がいつはじまったのか、その起源も分からないまま、わたしは塩尻市北小野にある信濃国二之宮の小野神社を訪ねた。小野の集落の中央に「憑^{たのめ}の里」とよばれる広大な自然林がある。そこに小野神社と矢彦神社の2つのヤシロが並んで建っている。

小野神社の御柱祭は「卯と酉の7年ごとに旧暦4月の干支にあたる日」におこなわれる。諏訪大社御柱祭の翌年である。2011年はその年にあたり、境内には古い御柱を伐って割木にしたものが積みあがっている。古い御柱は境内で燃やすのだという。

祭の衣装も諏訪大社とは異なる。「人を見たりゃ諏訪御柱、綺羅を見たりゃ小野御柱」といわれるように「衣装の美しさからいえば、小野神社の御柱祭が上だ」と地元の人は胸をはる。デザインをこらしたハッピーが華麗だ。

小野神社の祭神は、^{たけみ なかた}建御名方神である。由緒には、タケミナカタが信濃へ入国し諏訪に入ろうとしたが、先住の^{もれや}洩矢神がいたので入れず、しばらく小野にとどまってこの地方の統治にあたったので祭神としてまつられた、とある。また、御柱祭の起源は、^{ふつぬし}「経津主神との誓約により、国境に御柱を立てたのが小野神社の御柱祭とされる」とある（「小野神社資料」）。諏訪大社の御柱祭の起源は判然としなかったが、なんと、小野神社ではその起源がはっきりと書かれている。

タケミナカタが出雲を追われて諏訪にきたことについては、『古事記』の「国譲り神話」に つぎのようにある。

大国主神とその子・^{ことしろぬし}事代主神・^{あしはらのなかつくに}建御名方神が経営していた葦原中国に「^{たけみかづち}天皇族」の建御雷神がやってきて「この国は天皇族の統治すべき土地であるから出ていきなさい」といった。ただひとりタケミナカタだけが激しく抵抗し、タケミカヅチと力くらべをするが負けてしまう。タケミカヅチはなお、タケミナカタを^{しなの すわ}科野の洲羽の湖のほとりに追いつめて殺そうとした。そこでタケミナカタは「恐れいりました。わたしを殺さないでください。わたしはこの諏訪を離れてはどこにも行きません。また父の大国主神の命令に背きません。また八重事代主神の言葉にも背きません。この葦原中国は、天つ神の御子のお言葉にしたがって献りましょう。」といった。

タケミナカタを追ってきたのはタケミカヅチ、またはフツヌシという違いはあるが、どちらにしても、タケミナカタは出雲から、^{こし}越の国をへて信濃まで軍隊をひきいてき逃げてきた。そしてタケミナカタとモレヤノカミは、天竜川をはさんで戦った。結果は、モレヤノカミが負けた。

かんがえられるのは、タケミナカタがモレヤノカミを降参させた後、フツヌシがやってきたのだろう。そしてタケミナカタは、フツヌシに「諏訪からでません」と約束をさせられ、国境に柱が立てられた。つまり御柱は、タケミナカタを「軟禁するための目印」、あるいは「四至」ということではないか。

神社にある四至というのは聖なる場所をあらわす。しかし以上の推論からすれば、フツヌシが立てた柱の内側は、タケミナカタを閉じ込めるものであって、聖なる場所とはいえない。『日本国語大辞典』（小学館）によると、四至は「所有地、耕作地、寺域、境内などの東西南北の四方の境界」をいう。四至をたて、のちに神社を建てたということはあったかもしれない。

また、タケミナカタといえはその前後の記述からかんがえて古墳時代である。古墳時代に、神社という概念はまだない。まして社殿もない。ただ「聖なる地」という概念はあった、とおもわれる。縄文時代の環状列木にも、たぶん「聖なる地」ということがあった、とかんがえられる。そういうところが、御柱の起源や意味をあいまいにしているのだらう。

ところで、タケミカヅチとフツヌシはその後どうしたか。

二神は諏訪にはとどまらず、太平洋岸をめざした。なぜか。

まず、出雲にやってきたアマツカミは二手にわかれる。ニニギノミコトは西をめざして北九州の日向へむかったとおもわれ、一方、タケミカヅチとフツヌシは東をめざして太平洋岸の鹿島・香取の地にたどりつく。鹿島神宮にはタケミカヅチが、香取神宮にはフツヌシがまつられている。諏訪はその途中にある。いずれも諏訪には目もくれず、ひたすら太陽の地にむかって進んだとかんがえられる。おそらくタケミカヅチとフツヌシの二神は、寒くて気候の厳しい諏訪を嫌い、さんさんと太陽が輝く太平洋岸にあこがれたのではないか。それは、自分の土地をすててヨーロッパを南下し、太陽の輝くアフリカをめざしたゲルマン人のヴァンダル族に似ている。

第2章 タケミナカタ

タケミナカタの属する「出雲族」は、今から2100～2300年まえごろ、朝鮮半島から日本にやってきた種族とみられる。かれらもまた漢大陸からやってきた「弥生族」どうよう農業をよくした。その農業によって、出雲族は筑紫や吉備の国から瀬戸内海にかけてひろく進出した。東日本にやってきたタケミナカタはその稀なケースだったらう。

そうしてやってきたタケミナカタは諏訪の地に「五穀の文化」を持ちこみ農業をおこなった。やきはり焼壘、まちはり町壘などをおこない、イネ、アワをはじめ蔬菜をつくり、そのうえ鹿皮の交易までおこなったという。

このようにみえてくると、タケミナカタ一族は稲作だけの民ではなかったことがうかがえる。かんがえてみると、漢大陸からやってきて日本の農耕をもたらした「弥生族」は稲作だけでなかった。アワもヒエもムギもつくった。イネはその一つだった。いわば「五穀の民」である。

諏訪に安住の地をみつけたタケミナカタは、信濃の地を開拓したことによって、数多くの神

社にまつられている。長野県神社庁に登録（佐久・小県・諏訪・松塩・大北・更科・更埴・高井・長野・水内）されているヤシロは1845社ある。そのうち639社は、タケミナカタが主祭神である。ということは、それらはみなタケミナカタのもたらした農耕文化に感謝をしめすものではないか。

じっさい、諏訪大社の下社には樹木信仰がある。

樹木信仰は農業に通じる。なぜなら樹木の生えるところはみな水利のよいところだからだ。そして農業には水は欠かせない。であるから農耕神をまつるところはいまも「ご神木」や「入らずの森」を大切にす。すると「諏訪大社の下社にはその原型がある」といい。そういう聖地を御柱が囲んでいるからである。

いっぽう、モレヤノカミをまつっているのは、岡谷市川東にある洩矢神社ただ1社である。ということは、モレヤノカミはたいした事績をのこさなかったのか？ それとも縄文人にはヤシロや偉人をまつ、という風習がなかったためか？

諏訪の先住民であるモレヤノカミは、狩猟民・漁撈民だったであろう。守屋山という山を神さまにしているからだ。しかし、縄文人はふつう稲作をやらない。伝説によると、モレヤノカミにもいろいろの兄弟がいたが、みな湖の漁撈民や山の狩猟民だった。かれの息子も弓矢の達人で「千頭の鹿を射るのを念願とした」などという（今井野菊『諏訪物語』）。

タケミナカタは出雲の豪族だが、後は伊勢国多気郡の麻綾^{おみ}の豪族の八坂彦命の娘の八坂刀売^{やさかとめ}命とされる。そのヤサカトメの同族はふるくから信濃にすんでいた。こうしてタケミナカタとモレヤノカミのあいだに堅い結束ができ、さらに、タケミナカタの息子とモレヤノカミの娘がむすばれ、諏訪の人々はおおいに祝福した。わかい夫婦は隣の筑摩の郷まで開発しておおいに国づくりにはげんだ。モレヤ一族は、タケミナカタの命にしたがって未開の地をひらき、牧場をつくり穀物をうえるなど、諏訪の国づくりにはげんだ。征服者のタケミナカタと被征服者のモレヤ一族は、融合して諏訪の開発にはげんだのである。

第3章 聖山、聖木

1 上社は「聖なる山」、下社は「聖なる木」

諏訪湖は海拔970メートルの高地にある。そこに四つのヤシロをもつ諏訪大社がある。

諏訪大社は、上・下社にわかれ、さらに上社は本宮^{ほんみや}と前宮^{まへみや}、下社は秋宮と春宮に分かれている。諏訪大社はこの四宮を総称したものである。

上社は諏訪湖の南にあるが、そのヤシロの一つの前宮は上社の大祝とよばれ「神さまともみなされる神主」の住居とされてきた。いっぽう上社本宮はその大祝がまつる神のヤシロとされ、

そこにまつられる神さまは南方刀美みなかたとみといわれる。「タケミナカタのことか？」とおもわれるが、確証はない。

そして上社前宮はもちろん本宮にも本殿はなく「宝殿背後の守屋山もりやさんをおがむ」という。境内の南側の広大な社背林が「神体山」とよばれている。これはまったくの山岳信仰である。

いっぽう下社のほうは諏訪湖の北に春宮と秋宮の2つのヤシロがあり、ともにタケミナカタの後の八坂刀売やさかとめをまつっている。上社とどうよう本殿はないが、春宮も秋宮も、ならびた二つの宝殿のあいだに四角い瑞垣をつくって、そのなかに春宮は「スギの神木」を、秋宮は「イチイの神木」をまつっている。「そこに半年ずつ両神が鎮座される」という。するとこれはまったくの「樹木信仰」ではないか？

つまり諏訪大社には、上社の「山岳信仰」と下社の「樹木信仰」の二つがあるのだ。そして上社のほうはどうやら守屋山という「聖なる山」をまつり、下社のほうは「聖なる木」をまつっているのである。

いったいこれは何を意味するのか？

諏訪湖をかこむ山々は、古くから信仰の山として崇拝されてきた。

湖の東南30キロメートルにある八ヶ岳には「岩長姫いわながひめ」がまつられている。イワナガヒメは『記紀』にでてくる神さまであるが『記紀』では、妹の木花佐久耶姫このはなさくやの脇役に甘んじている。コノハナサクヤヒメが「天皇族」のリーダーであるニニギノミコトに見染められて「天皇族」の系譜にはいってしまうが、イワナガヒメは遠ざけられたのだ。

二人は大山積見神おおやまつみというその名からして縄文山岳民の子である。その縄文人ないし山岳民の娘の一人は天皇家にはいり、もう一人の娘は縄文人ないし山岳民のまま生涯をすごしたのである。それがこの八ヶ岳である。八ヶ岳の神さまになったのである。

じっさい八ヶ岳山麓では、いまでも縄文時代の狩猟をおもわせる豪快な「御射山祭みさ」が毎年八月末日におこなわれている。

また諏訪湖の真東の20キロメートルには蓼科山れいこがある。地元では「女の神山め」としてたしまれている。これも縄文人たちの山岳信仰の対象だろう。

諏訪の人々にとってもっとも大切な山は、諏訪大社本宮の南10キロメートルにある「守屋山」だ。じつはこの山が本殿のない諏訪大社の本殿とされる。諏訪大社の神体山である。その山は湖のどこからでもよく見える。「モリヤサンに雲がでたら雨が降る」などといわれるように、むかしから人々の生活に密着してきた山だ。

2 七木湛

諏訪には、「諏訪上社物忌令之事ふつきれい」にみられる「七木湛たな」の信仰がある。「湛木」は「神が現

れる聖なる木」とされ、諏訪上社の神事がおこなわれる。14人の神主が神使巡幸をし、湛の樹下で、「神降ろし」「神上げ」などの神事をおこなう。「七木」はつぎのとおりである。ただし、現在はほぼなくなってしまった。

(1) 桜湛木 (茅野市玉川栗沢天白神社内)、(2) 真弓 (檀) 湛木 (諏訪市湖南南真志野野明明神下)、(3) 干 (桧) 湛木 (茅野市玉川神之原七社明神内)、(4) 椴^{とちのき}湛木 (原村室内關蘆社)、(5) 松木湛木 (諏訪市中洲神宮寺宮田渡大祝邸)、(6) 柳湛木 (茅野市本町)、(7) 峰湛 (茅野市宮川高部) (写真2)

「湛」とはなにか？

『大漢和辞典』(諸橋轍次)には、沈む、清らか、浸すなどの意味、とある。

民俗学者の折口信夫は「たたりの言葉には〈出現〉の意味があった」とし「神殿松木湛」について「これらの七木は、桜なり、柳なりの神のたたり木と言ふ儀が忘れられたものである。大空より天降る神が、目的を定め滝に憑りゐたるのが、たたるのである。即ち示現して居られるのである」とのべている(「幣束から旗さし物へ」)。

神道考古学者の宮地直一は「湛の神事が祟りの神事である」とする。

また、考古学者の藤森栄一は「湛の漢字には、川流をたたえる意義以外、神を祭る意は全くない。室町時代の諏訪関係古文書には相当な練文者でも、当字が多い。湛も勿論、神の讚え言葉からきた当字であろう」とする(『藤森栄一全集』)。

湛木の意味を詳しく知りたいとおもったが、「諏訪上社物忌令之事」に七本の木の名前が列記されているだけなので、それ以上のことはわからない。

そこでわたしは「峰の湛」を訪ねた。

上社の前宮の前の国道20号線を本宮の方向に1キロほど行き、前宮につづく山へむかった。山腹に宮前グラウンド公園があり、上方に「鎌倉街道」という細い道がある。そのわきにある樹齢200年のイヌザクラの大木が「峰の湛」だ。根元から大きく枝分かれして天をついでいる。根元に石とコンクリート製の小さな祠が2つ並んでいる。藤森栄一のように、むかしは石がおかれていたのだろう。(写真2)



写真2 峰の湛(茅野市宮川高部)

3 七石

諏訪には「七木」とならんで「七石」の信仰がある。上社本宮の「物忌令」に「此木共ノ本ニテハ皆々神事あり」と記されている。「七石」はつぎのとおりである。



写真3 硯石 (上社本宮)

(1) 硯石^{すずりいし}

上社本宮上段の拝殿右側の山腹にある自然の巨石・磐座が「硯石」とよばれている。東西宝殿の中央、四脚門中央、下段の天滴舎を通して一直線に並んでいる。この軸線にたいし、御柱が右前を一之柱として左まわりに四本立っている。硯石の重さは400トンもある巨石で、上面中央に凹部があり水がたまっているという。

一般人は立ち入り禁止区域なので、遠くから岩の上部を拝むばかりである。(写真3)



写真4 小袋石 (茅野宮川高部 磯並社境内)

(2) 御沓石^{おくつし}

上社本宮境内下壇にある。一之御柱の後ろにあって注連縄が張られている。上古の貴人の沓の形に似ているところから名づけられたといわれる。苔蒸した巨石である。後世になって天逆鉾石を立ててまつっている。

(3) 小袋石^{おふくろいし}

茅野市高部の山地にある。守屋山山麓の「磯並社」背後にある巨岩だが、呼名の由は不明。

巨石のある場所は急斜面で、その下方にいくつも小祠が点在している。(写真4)



写真5 児玉石 (諏訪市湯の脇 児玉神社境内)

(4) 児玉石^{こだまし}

諏訪市湯の脇という地区の児玉神社境内にあり、住宅地に囲まれている。社殿の周りには巨石数個が集合している。岩のなかほどに、ヘソのように窪んだ小さな空洞に水がたまっている。穴には湧水伝説があり「イボ」がとれる信仰がある。また同社には、御神体として石棒が多く保管されているという。(写真5)

(5) 御座石^{こざいし}

建御名方神の母神如奈川比売がはじめて諏訪入りしたときに座したという。上宮境内説と御座石神社 (茅野市矢ヶ崎) 説がある。御座石神社の御座石は社殿左にある。(写真6)

(6) 亀石

宮川の流れが茅野市安国時地区に入った辺りにあったとされるが、移転して今はない。

(7) 蛙石

上社本宮境内の蓮池の中に名がみられるが、現在は不明。諏訪市大熊にも同名の石がある。

なかで(5)の「御座石」には「大明神は岩の御座所に降りたもう降りたもう」という神楽歌があるように神の依代とみられ、上社本宮の硯石はそれを拝むことによって守屋山を拝するとされる。

わたしはそれらを見てまわったが、みな巨石だった。

4 薙鎌

諏訪大社のご神体といわれるものに、「薙鎌^{なぎがま}」というものがある。

「薙鎌」は鉄の薄い板でつくられたもので、ツツノオトシゴのような形をしている。(写真7) その背中に羽状の切込みがあり、目、くちばし、尾のようにみえる。上社御柱用の木が決まると、薙鎌をその幹に打ちつけ、伐採までの間、台風や、雷、大雪、山津波などの災害から人々をまもるとされる。

薙鎌という名は、長柄のついた下草や下枝などを刈る鎌からきている。しかしわたしは、薙鎌はたんに草を刈る鎌ではなく、ほんとうは「発火器」として使われたのではないかとおもう。

縄文人は石と石を打ちつけて火をおこしていた。しかし簡単ではない。だが石と鉄のばあい、石と石に比べはるかに点火しやすい。であるからこそ薙鎌は発火器という「聖具」になった、とかがえられる。じっさい江戸時代には石と鉄を打ちつけて、その火花を消し炭に点火させて火をおこすのが常だった。

しかし諏訪には縄文の遺跡はあっても鉄の文化はまったくない。だれが、鉄の文化を持ちこんだのであろう。かがえられるのは、タケミカツチだ。

『古事記』に、タケミナカタとタケミカツチが争ったとき、タケミナカタがタケミカツチの手をつかむと剣の刃になったので恐れをなして引きさがった、という話がある。青銅しかもたない出雲族が、鉄をもったアマツカミ軍事種族に負けたのであろう。

アマツカミ軍事種族は、鉄の文化だけではない。巨木の文化ももっていた。土地の総大将大

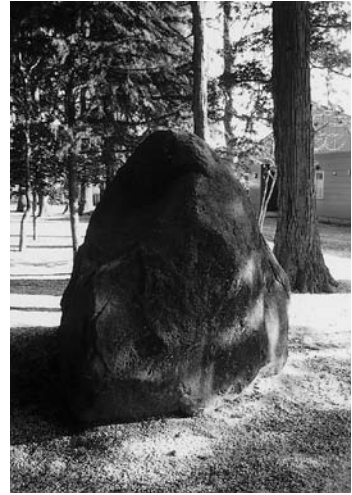


写真6 御座石（茅野市本町御座石神社境内）

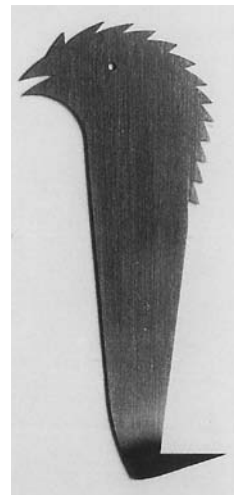


写真7 明治17年の形に復活の薙鎌

国主を服従させたあと、「権力はゆずるが、祭祀権はとどめてほしい」というオオクニヌシの要求にしたがって、高木の神はオオクニヌシのために「底つ岩根に宮柱太しり、高天原に氷木高しり」という「アマツカミの宮殿」を建てている。さらに橋や舟などもつくっている。

というところをみると、アマツカミ軍事種族はすぐれた水軍・軍事力をもっていただけでなく、巨大な建築や橋、舟などの「巨木文化」をもっていた。

巨木文化はアマ族の文化である。金沢市にあるチカモリ遺跡や石川県の真脇遺跡の環状列木にみられるように、北陸は舟の一大生産地帯だった。

タカギノカミをはじめとする男性を主体とする渡来系軍事種族と、もともと日本にいた女系集団のアマ族とが合併して、アマツカミとなり日本を統一したという説（上田篤『越の国になぜ加賀か』）にしたがえば、アマツカミは「御柱という巨木文化」と「薙鎌という鉄の文化」の二つの文化を諏訪にもたらしたことになる。

御柱の木に薙鎌を打ちつけるのは、巨木文化と鉄の文化の融合を示すもの、とかがえられる。

第4章 ミシャグジ

しかし、諏訪には、さらに重大な「ミシャグジ」という人々を禍いからまもる原始信仰がある。

御左口神、御左口神、守御作神、狭口神、三社口神、産護神、尺神、御社宮司神などいろいろな漢字で書かれている。また、ミシャグジ、シャグジ、ミサグチなどとよばれ、その音と表記はさまざまである。民俗学者の今井野菊の調査によると、日本全国では200余種もあるという。今井は、半生をかけてまったく一人で長野県その他の地域に点在する「ミシャグジ」を踏査した。今井の調査によれば、長野県には御社口神が675社ある。(図1) うち、諏訪郡には109社をかぞえる。(図2) そのほか県外の主なものをあげると、静岡県233社、愛知県229社、山梨県160社、岐阜県116社が分布している（「御社宮司の踏査集成」）。

この「ミシャグジ」の神々を統括しているのが、タケミナカタに降参した地のカミの洩矢神である。そのモレヤノカミを奉斎したのが諏訪大社の神長官・守矢家である。守矢家はいまもつづいている。現当主の守矢早苗さんは、79代目にあたる。

1 「ミシャグジ」とはどういう神か？

では、「ミシャグジ」とはどういう神さまか？

考古学者の藤森栄一は「記紀に主役をつとめるような神ではなく、自然神で、食物、生産または土地についての強い権限をもっていた。(中略) 多くは一小単位の聚落、つまり村々の神で、村の台地の上や谷口にあり、はじめは社殿をもたず、巨木、巨岩、尖った石、立石、棹などに

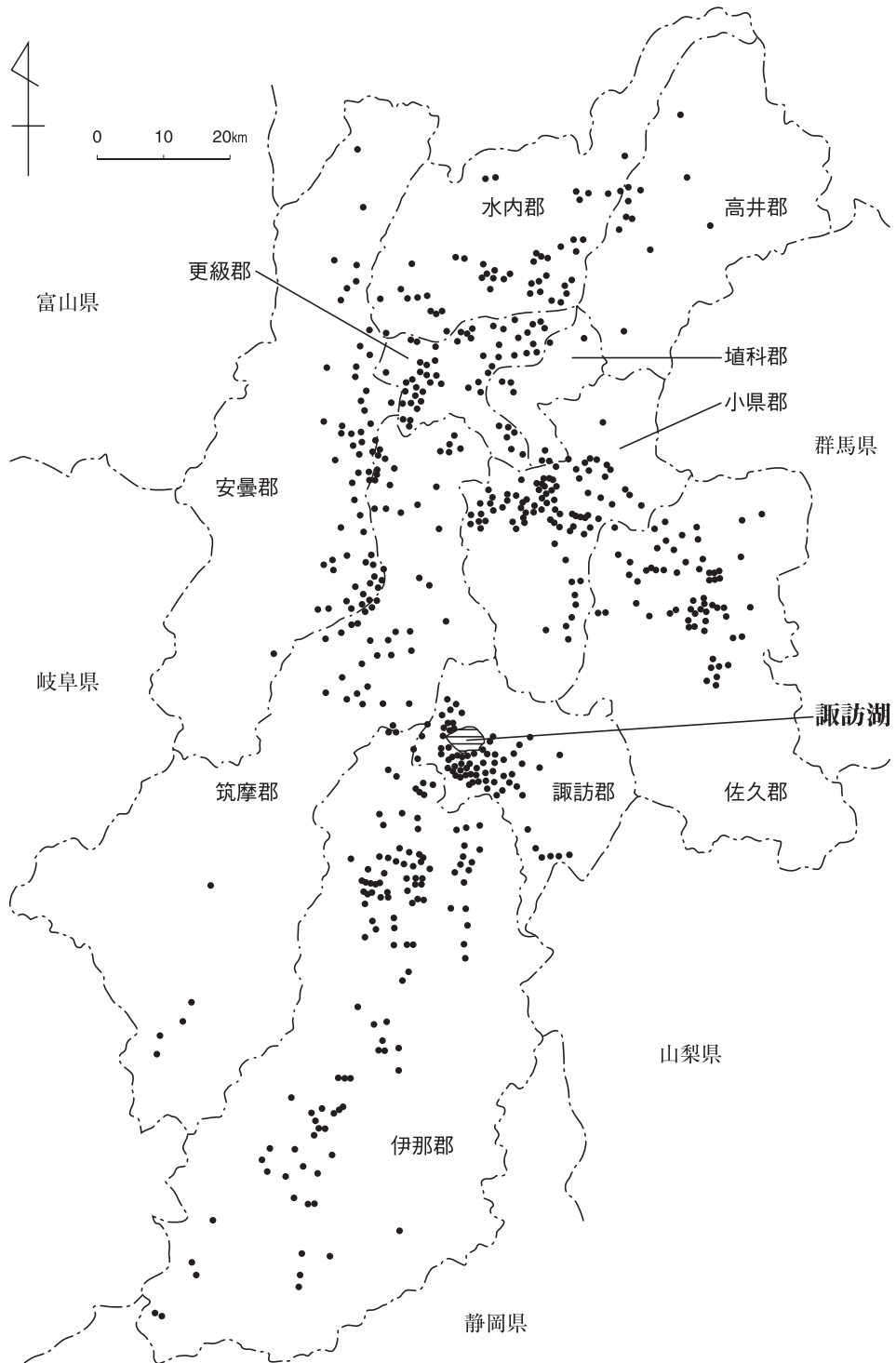


図1 長野県の御社宮司分布図（今井野菊「御社宮司の踏査集成」をもとに作成）

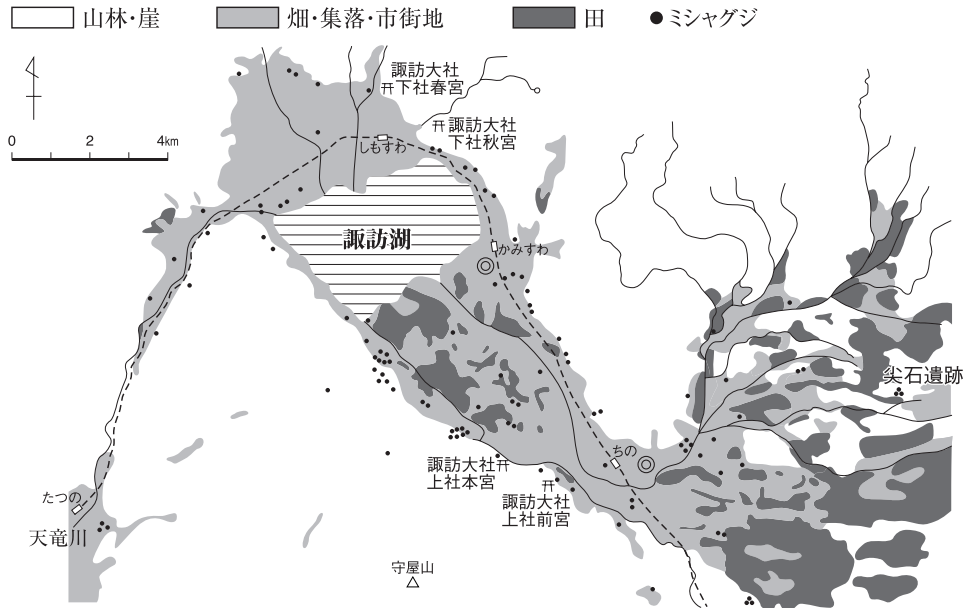


図2 諏訪湖を中心とする地域の土地利用図とミシャグジの分布 (今井野菊「御社宮司の踏査集成」をもとに作成)

おりてくるナイーブな自然神であったようである。」とする(『諏訪大社』)。またご神体について「立石状自然石や石器時代の石棒頭がもつとも多い。その石棒も、縄文後期以降に多くみられる石剣や石刀や、磨かれた緑泥片岩の小型石棒は少なく、中期縄文に多い安山岩敲製の雄大な石棒である」という(『銅鐸』)。

民俗学者の柳田国男も『石神問答』のなかでおなじようなことをいっている。

また、近代神道史の宮地直一は「この地方一円に拡がった土俗信仰として湛^{たは}の思想との間に不可離の關係の潜むことに注目するもので、もともと湛によって崇拜された精霊が御左口神の発生源とし、人間生活と直接のつながりを保って、これを祀る者のために守護神としての性能を発揮し、日々夜々にかけて、彼らの生活を保証する恵の本主であると同時に祟りの根源とも信ぜられた土地神である」と書いている(『諏訪史二巻』)。

今井野菊は「先住民に〈いねづくり〉を教えた諏訪大神タケミナカタを〈農耕の神〉とし、年々土地を闢^{さく}り、稲をつくるのに天災地変を取り除いて保護する神を「さく神」と憑^{たの}んで祈った。御社宮司神の祀られているところに古樹があり、その木の根元に祠がある。ご神体として石棒が納められているのが典型的な姿だ」とのべている(『古代諏訪とミシャグジ祭政体の研究』)。

「さく神」について、郷土史の北村皆雄と今井は、諏訪地方で地面を掘ることを「さくる」といい、「畑をさくる」と日常につかう言葉から、「さく神」を土地の開発と結びつけてかんがえている。

そして考古学者の宮坂英昭は「村々におけるミシャグジのまつられ方をみると神体は石棒と
していることが多い」と書いている（『諏訪市史上巻』）。

さらに「伊勢神宮の霜月神楽歌」の一節に、「ミシャグジは岩屋にいる、沢にいる、木の葉
の上にいる、地にいる、峰にいる……。精霊はいたるところに住んでいる」とある。

ほかに「江戸名所図会」には、「祈願ある者、成就の後は必ず何よらず樹木を携え来り」と
記している。

これらをまとめると、ミシャグジは木や石に降りてくる精霊で、人にも憑く。そして神木、
石棒、石、森、藪をまつる家の祝神である。ご神体は「石棒」であることがおおい。原始の信
仰そのものである。



写真8 小野の石神（古町）



写真9 小野の石神（大出）

2 「ミシャグジ」を訪ねる

塩尻の小野という集落の「ミシャグジ」を
訪ねた。ここには、さきに御柱祭のところで
ふれた小野神社がある。

「古町」という集落の畑の中をすすみ、山麓
にあるサワラの木にたどりついた。その根元
に「ミシャグジ」の小祠がある。（写真8）瑞
垣のなかに、コンクリートの土台に立てられ
た2本の石棒があり、瑞垣には数個のお椀が
くくりつけられている。立札には「石神・神
体の石棒は縄文中期、今から3～4000年前の
もの。昔は耳塚様といって耳病に霊験がある
と信仰が厚く、お椀の底へ穴をあけて柵など
につるしてあるのが見られたが今はない」と
ある。ご神体は「石棒」である。

案内していただいた小野神社資料館の横沢
さんは「大正10年ごろは1本の石棒で、高さ
60センチ、幅20センチぐらいだった。当時、
瑞垣はなく、たくさんのお椀が供えられてい
た。自分は子どもだったから何の神さまかは
わからなかった。」という。今は、近くの医者
が管理している。

つぎに「大出」という集落の「ミシャグジ」

を訪ねた。(写真9) 民家の畑の中にある。背の低い鳥居があり、イチイの木の下に1メートルほどの石棒がたっている。角があって、研磨されたものではない。人間が手を加えたとおもわれる。そばに石皿と小祠があった。

そこからさらに南へいくと、同じく民家の畑の端に「ミシャグジ」がある。木が枯れてしまったのか、伐採された木株が転がっている。石垣の上に小祠がある。ご神体は確認できなかった。

ふたたび小野神社へ戻った。細い水路が、小野神社と矢彦神社の境界を示している。境内の南側の藤池東に背の高いサワラの木がある。その根元の瑞垣の内側に「御鈴様」(写真10)といわれる石がある。苔むした20センチ大の自然石だ。

小野に別れをつけ、茅野市にある「神長官守矢史料館」へむかった。諏訪大社前宮と本宮の中間にあって、諏訪地方の歴史が刻まれている場所だ。山裾にあって、はるかに八ヶ岳の輝く峰々がのぞまれる。周辺には縄文の遺跡や古墳が数多く点在している。史料館の壁には、狩猟民を証明するように、シカやイノシシの頭が整然とはりついている。(写真11・12) そのわきには、串刺しになったウサギの展示がある。

史料館のまえに守矢家の屋敷がある。裏山の斜面地にサワラの木があり、樹下に「御社宮司神の祠」がある。(写真13) 学芸員に「ご神体は何ですか」と尋ねた。彼は「守矢家の私有地なので誰も見たことはありません。開けたこともないのでわからない。」といった。



写真10 小野神社の石神 (御鈴様)



写真11 神長官守矢史料館のウサギの展示



写真12 神長官守矢史料館のシカとイノシシの頭の展示



写真13 神長官邸のみさく神



写真14 石棒（塩尻市立平出博物館の展示）



写真15 石棒（尖石縄文考古館の展示）

小野と諏訪にある5か所の「ミシヤグジ」を訪ねたが、みな樹の下にあった。

第5章 縄文人の聖所

八ヶ岳の西南麓は「縄文大王国」とよばれる。棚畑遺跡、^{とがひし}尖石遺跡、^{あきゆう}阿久遺跡、井戸尻遺跡などの縄文中期の集落遺跡が点在し、地域全体で300か所以上の集落遺跡が見つまっている。

とりわけ、棚畑遺跡からはほとんど完全な形の「縄文のヴィーナス」や「仮面の女神」、「方形柱穴列」などが発見され、世間の耳目をあつめた。

わたしは、茅野市街から八ヶ岳山麓にある「尖石縄文考古館」へ車を走らせた。八ヶ岳の山麓にむかって進むと広い野原がみえた。発掘された集落跡は埋め戻されているが、眺めのよい場所に集落があったことがわかる。その一面に近代的な建物の尖石縄文考古館がある。

さまざまな縄文土器が展示されているなかに、「縄文のヴィーナス」がきわだつ。高さ27センチ。切れ長のつりあがった目、小さな胸、大きくはりだしたお尻。表面の雲母がまじった部分が金色に輝いている。しかし土偶というものは、壊すためにつくられたものだ。「縄文のヴィーナス」は奇跡的な発見だった。

土偶は壊されて発見されるが、石棒は当初のカタチをそのまま残しているものがおおい。たくさんの縄文の土器のなかに、石棒と石皿のコーナーをみつけた。(写真14・15) 一人では運べないくらい大きな石棒、凹状の石、自然石にちかいものなどさまざまだ。

わたしは学芸員に「石棒はミシャグジと関係がありますか」とたずねた。学芸員は「石棒が何に使用されたかはわからない。証拠がないから、関係があるともないともいえない。解釈の問題です」といった。それは、諏訪の他の博物館でも同じだった。



写真16 平出遺跡(中央広場の立石から大洞山をのぞむ)

いっぽう、諏訪郡原村の阿久遺跡は、大量の石が発見されたことで有名になった。今から6000年ほどまえにつくられ縄文前期のもの

である。30年ほどまえのこと、阿久遺跡から縄文時代前期の遺跡が発見された。拳大から頭大ほどの石を数百個もつめた270基以上もの穴が、巨大なドーナツ状のストーンサークルになって発見された。さらにそれらのストーンサークルの内側から、770基もの土坑までみつかった。

当初は「墓地か」とおもわれたが、よくみると、北八ヶ岳の南端かの天狗岳の頂上から日の出が観測される。そこから日をおうにしたがって日の出は南八ヶ岳の峰々や谷を移動し、最南端の編笠山に木や時ちょうど秋分になる。1年の4分の1が経過する。まさに太陽の運行にあわせてつくられたような「観測所」だったのだ。

また、ストーンサークルの中心には120センチほどの大きさの「立石」がたっている。そこから北にむけて高さ1.2メートル、幅60センチメートルの8枚の列石が2枚ずつならび、そのさききに円錐形の山がみえる。諏訪富士とよばれる蓼科山である。ここは、太陽の生命力をうける場所ではなかったか? といわれる(上田篤『庭と日本人』)。すなわち、太陽の生命力を石にこめる「聖なる場所」だという。

さらに、諏訪湖の北西にある塩尻の平出遺跡は、5000年まえの縄文遺跡である。116軒の住居跡がみつきり、その中央広場の一角から、倒れることなく当時のまま地面に屹立している2つの「立石」が発見された。(写真16) 遺跡の南側には標高939メートルの三角形をした大洞山がそびえている。2つの石をむすんだ延長線上に、その山がある。

石が立っている場所は、縄文人にとって「聖なる場所」とかんがえられる。

縄文人は、①太陽が生まれた場所。②じっさいに災害がおきた場所。たとえば、木などに落雷した場所。それぞれに「聖なる場所」をかんがえ、その目印を示すために「柱」を立てた。それは依代ではなく、あくまでもランドマークである。それが諏訪の御柱へつながったのではないか? 聖なる土地は、しいていえば「遥拝所」である。縄文人は、そういう聖なる場所を囲んで柱を立てた可能性がある。その囲いは、のちの神社の四至になった、とおもわれる。

まとめ

今回の調査は、諏訪の自然信仰あるいは原始信仰があったとされる木や石、山や祠などを調査した。

調査でわかったことは、諏訪地域には「五穀の文化」、「巨木文化」、「鉄の文化」、「石の文化」という4つの文化が重層していることである。上田篤氏のいう①第一の聖所——神殿と鏡・剣の文化が「鉄の文化」にあたり、②第二の聖所——自然の地物すなわちご神木、いらすの森、泉などの木の文化または水の文化が「五穀の文化」にあたり、③第三の聖所——自然の地形すなわち巨石、岩、山が「石の文化」にあるとみられる。ただし、「巨木文化」についてはどこに分類されるのかを考える必要がある。いずれにせよ、この地が日本人精神文化をかんがえるベストの地の一つであることにはまちがいない。

その四つの文化とは、

一つは、タケミナカタがもたらした農業——「五穀の文化」

二つは、アマ族がもたらした御柱祭——「巨木文化」

三つは、渡来種族がもたらした薙鎌——「鉄の文化」

四つは、先住族のモレヤノカミがまつるミシャグジ神——「石の文化」

である。

いずれにせよ、諏訪には、先住族、出雲族、天孫族がまつる「聖地」の三重層構造がみられる。

先住族であるモレヤノカミは守屋山、七石、ミシャグジなどを、出雲族のタケミナカタは七木、五穀を、出雲族を降伏させたタケミカツチやフツヌシは御柱、鉄の痕跡である薙鎌をそれぞれ聖なるものとしたようである。しかし諏訪大社には本殿はなく、鏡も剣も刀もまつられていない。あるのは薙鎌のみである。つまりここには天孫族は定住しなかった、ということの意味している。彼らはここにタケミナカタを閉じ込めてただ通過したにすぎない。考えさせられることである。

さいごにこの調査をつうじて、わたしは現代の学問研究の問題点を見る思いがした。

わたしは以前から、御柱の形は北陸の「チカモリ遺跡」や能登半島の「真脇遺跡」などにみられる環状巨木などとよく似ている、とおもっていた。また「ミシャグジ」の「石棒」は縄文時代の「石棒」とつながりがある、とおもっていた。そこで、諏訪であった学芸員たちにその共通性を質問したところ、かれらは「解釈はそれぞれあります」とか、「証拠がないからなんともいえない」などとみな逃げた。なかに「学問があるので言えない」とはっきり口にする人もいた。

かんがえてみると、一般の石棒は考古学者のテリトリーであり、ミシャグジの石や石棒は民

俗学者のテリトリーである、また御柱は民俗学者の領域であり、環状巨木は考古学者の領域である、というように、それぞれ縦割りの専門にはっきりとわかれている。お互いこのテリトリーや領域を侵してはならないのである。これが日本の学問研究のセクショナリズムの実態である。古代史学を総合的にみる研究者がいないのである。日本の学問の致命的欠陥を見る思いがしたのである。